機械的記銘と論理的記銘

一体、記憶の仕方には、機械的な記銘と論理的な記銘とがございます。機械的記銘法というのはいわゆる丸暗記でして、これは生後の三年間が最も強い。これは時実先生の御見解であり、また私の実験でもそのように認められます。この時期は大変無造作に覚えます。覚えようとは思わないのに覚えられてしまうのです。生後の三年間、それに引き続く二年間、つまり小学校に入るまでの幼児は、漢字を実に無造作に覚える。しかも、これは、強く記憶にとどまってなかなか忘れ難いもののように思われます。ところが、これは年をとるに従って、つまり一年生、二年生と学年が進むにつれて、機械的記銘の仕方というものはどんどん低下して行きます。文字が覚えにくくなると同時に、忘れやすくなります。だから、昔から、学校の漢字教育はうまく行かないわけです。

機械的記銘法に対する論理的な記銘法というのは、一般的に言いますと、小学校の二、三年生から芽生え、年と共にどんどん発達して行きます。しかし、二、三歳から漢字を学習させますと、五、六歳で論理的記銘法の芽生えが明らかに見られます。従ってこの記銘法は、早く漢字学習を始めれば始めるほど、早くから発生するものと思われます。これは、丸暗記した漢字が、頭の中で自然と分類され整理されるような働きが、人間の脳にはあって、そのためではないかと思われます。例えば「鳩」という字を学び、次に「鶴」という字を学びますと、幼児は「あ、この二つの漢字には同じ部分がある」と気づき、それを指摘します。そこで、「鳥」という概念について教えてやりますと直ちに「鳥」という概念を理解して、今度は「鳥」のついた字、例えば「鶏」を見ると、「これは鳥の名前に違いない」と推定するようになる。このように、まだ学習しない漢字でも推理する、という能力がついて参ります。従って、論理的記銘法は、もっと早く芽生え、発達するものではないかと思われます。一般的には、小学校二、三年にならなければ無理だと言われていますが、早くから漢字に接していれば、小学校に入らないうちから芽生え、発達することは確かだと思います。そしてこの論理的記銘法によりますと、漢字は大層覚えやすく、しかも忘れにくいものになります。

ところが、学校教育では、漢字を全く丸暗記、つまり、機械的記銘に訴えて学習させています。論理的記銘法を全く無視しています。漢字学習に最も適した方法によらないわけです。これが学習効果の上がらないもう一つの理由です。漢字は、文字の中で唯一の優れた体系を持った文字です。漢字の 90％以上が形声字と呼ばれるものですけれども、この形声字というものは、実に論理的に見事に構成された文字であります。従って、そういう論理的記銘に最も適した漢字を、機械的記銘で学習させているということは、全く方法を誤っている、と言わなければなりません。